

## 医療における蓮如のごとく

御 供 泰 治

## Let's Do in the Medical Care as Ren-nyo Did

MITOMO Yasuharu (Disease and Pathology)

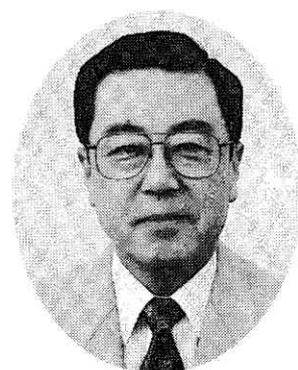
この度平成16年3月をもって定年退職することになりました。私が昭和41年の医学部卒業生であることをご存知の方は、アレ？まだ3年先ではないのかと思われるでしょうが、実は私には名市大入学以前に他の文科系大学で学んだ時期があったのです。その大学在学中に巡り合ったアルベルト・シュバイツァー博士の「わが生活と思想より」というたった一冊の本により、突然人生の変更を思い立った「軽薄な一青年」を、快く迎え入れてくれた(?)名市大に対しては、常に人一倍の感謝の気持ちと熱き思いを寄せながら、今日まで過ごして参りました。

学生時代から数えて、途中のアメリカ留学と愛知県がんセンター研究所勤務の3年間を除き、およそ40年にわたり通い慣れた「川澄キャンパス」を去ることになりました。なかでも昭和63年4月に医学部から、看護学部の前身である看護短期大学部へ移動してから、早16年が過ぎ去り、今更ながら「光陰矢のごとし」を実感する思いであります。

50歳で意を決して医学の世界から看護の世界へ踏み込んだとき、自分の気持ちの中で与えられた16年という年月を三等分しました。最初の5年間では改めて看護学とは何か、医学とはどこがどう違うのかを自分なりに勉強しよう。中の5年間では看護の世界における医者としての自分に、何ができるかを探り当てよう。そして還暦を過ぎたら最後の6年間でそれをまとめて看護の世界に何かを残そう、と密かに心に誓いました。

そして16年経った今、幸いにして何一つ心残りなくこの場を去ることができる心境に至っています。私がこうまで断言できるのは、「二人の孝行息子」がいてくれるからなのです。私たち夫婦には実際に二人の息子がいますが、ここで彼らを自慢するほど親バカではありません。実は私には「女房抜きで生んだ二人の息子」がいます。

まずその長男の名を「デルカン」といいます。これは「ここが出る看護師国家試験ポイント」という1997年以來の看護師国家試験直前対策ブックの愛称です。私の苦手の分野を理解ある三人の先生に補ってもらいながら、年度版として出版しているものです。発刊以來北海道から沖縄まで、すでに10万人以上の受験生に利用してもらっています。



御供泰治 教授

現在のわが国では同じ看護師になるのに、専門学校から大学まで実に複雑な道があります。その制度の是非はともかくとして、医療の現場において知識や技術に大きな差が生じて、それが多くの医療事故につながっているとすれば、日本国民にとっては不幸と言わざるを得ません。幸い学生たちからは「分かり易くて勉強が好きになった」とか「苦手の分野がなくなった」などの声をもらい、さらに教員の方々からも「なぜそうなるのかの説明に便利で、普段の授業にも使っています」と言ってもらっています。

毎年2月の国家試験が終了すると間もなく、出版社から問題が送られてくるので、早速自分でやってみます。その感触を参考にして編集部と何度となく次年度の傾向と対策を練りながら、9月までに新版を作り上げます。10月から翌年2月にかけて書店の“看護コーナー”に沢山並べられ、それが減っていくのを休日に家内と見て回るのが、今までは毎年の楽しみな行事の一つになっています。

次に二男の名は「内臓年齢」といいます。これは健康

## 医療における蓮如のごとく

教育のツールの一つとして、1998年以来私が提唱してきた四文字熟語です。看護の世界に来てからの数年間は当時3階にあった図書室に入り浸りで、まずはナイチンゲールから始めて、キューブラーロス・マザーテレザなどの原書を読み漁りながら、「自分もナイチンゲールにとっての、ドクター・サザーランドのような存在になろうか」、しかし「はたして私にとってナイチンゲールが、目の前に現れる日がくるだろうか」などと考えを巡らせたものです。そうした中でミシガン大学のヒンショウ教授が「看護研究の大事な目的の一つは、救命につながる治療や健康を強化する知識が、効果的に保健医療事業の中に取り入れられ、人々の生活の中で欠くことのできない位置を占めるようにすることである」と書いているを知った時、「目からウロコが落ちるとは、まさにこの事か」という思いがしました。

医療における高度な知識や技術は、最終的に一般の人々に還元され、理解されてはじめて価値のあるものとなり得るでしょう。したがって第一線の研究者に代わって、誰かがその伝える役を演じなければなりません。それはあたかも新鸞の開いた浄土真宗の教えをまとめた難関な「歎異抄」を、分かりやすい仮名文字に直し、一向宗として広く世に伝えたあの「蓮如」にも似た役目と言えるのではないのでしょうか。数年間取り組んだ人生の命題に対して、「それこそが私に与えられた役割ではないのか」という解答にやっと辿り着いたわけです。

医学部時代の「白血病の細胞回転」の研究から、新たに「健康科学」に方向転換してから数年して考え付いた「内臓年齢」は、初耳の珍しさからか新聞や週刊誌などメディアの取材を何度も受けました。講演会やテレビ・ラジオに出演する機会が重なるうちに、「健康日本21」に関する政府の行政企画の一つとして、俳優やタレントとの共演による生活習慣病予防のPRビデオ「主治医はあなた！」にも出演するに至りました。卒業後全国に散って保健師として活躍している教え子たちから、先生の出ているビデオを使って仕事をしています」という知らせを受け取り、人生で彼女らと再度のつながりが確認できることは、この世界に生きてきた者としては、また格別の喜びであります。

これまで日本人を対象に「内臓年齢」（メディカ出版）と「内臓年齢からの警告」（講談社）の二冊を出版しましたが、その後「台北市と天津市」の二つの出版社から、それぞれ「繁体字と簡体字」の異なった中国語に翻訳されて、今では台湾のみならず中国本土でも発売されています。また、厚生労働省認定の新企画出版社で作られた「内臓年齢は警告する」というパンフレットは、都道府県・市町村の保健所・保健センターを通じて、多くの国民に読んで頂いております。

聖路加の日野原重明先生は「人生での65歳は、一日でいえば午後3時である」と言っておられます。近年わが国では、定年を第3の人生のスタートと呼ぶにふさわしい「長寿社会」となってきました。この度私の定年退職と時を同じくして、一宮市に創設される「愛知きわみ看護短期大学」において、引き続き「看護教育と研究」にたずさわる機会を与えて頂けることになり、16年前と同じモチベーションを感じているところです。

今日までの人生で接したどの一人を欠いても、現在の私は存在し得なかったと思う時、その一人一人に心より感謝すると共に、名古屋市立大学、中でもとりわけ看護学部の今後益々の発展を祈念してやみません。